

学力向上推進地域

連携中学校区：福山市立大門中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
福山市立大門中学校	13	384
福山市立大津野小学校	16	343
福山市立旭丘小学校	14	275
福山市立野々浜小学校	8	149

(R2.11.1現在で記入)

1 指導上の課題

(小学校)

- ・国語科では、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて記述することに課題がある。
- ・算数科では、減法の計算の仕方を解釈し、除法に関して成り立つ性質を記述することに課題がある。

(中学校)

- ・国語科では、文章の内容の話題や方向を捉えて、自分の考えをもち記述することに課題がある。
- ・数学科では、事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する力に課題がある。

(小中共通)

- ・大門中学校区4校が共通して、国語科・算数科において根拠をもとに自分の考えを表現することに課題がある。
- ・授業では、解決しようとする課題について、「なぜだろう。」「やってみよう。」と感じている児童生徒が、昨年度と比較してほとんど増加していない。
- ・フリートークをはじめとした子ども主体の学びの場の設定を校区で進めてきているが、児童生徒自身が学びたいという意欲を高めていく取組が不十分である。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

主体的に学び、思考力・判断力・表現力を高める授業づくり
～課題発見・解決学習と協働の学びを通して～

②研究のねらい

授業の中で児童生徒同士の協働の場面を設定し、児童生徒とのかかわりの中で、学び合いを通して主体的に学ぶ児童生徒を育成し、学習内容の定着を図る。

(2) 取組について

【学力向上に向けての取組】

- ①協働的な学びに向けた授業づくりを行う。
- ②学習に関わるアンケートを実施し、児童生徒の変容を見取る。
- ③振り返りを児童生徒の言葉で行う。

【学習習慣の定着・家庭学習の充実】

- ①生活アンケートの実施

②自主ノートでの予習・復習の取組

【個に応じた指導の充実】

- ①個別の指導計画に基づいた指導
- ②長期休業期間中の学習支援
- ③定期試験対策としての質問教室の開催
- ④習熟に応じた追試験の実施
- ⑤Rey-Osterrieth複雑図形の活用
- ⑥家庭教育支援アドバイザーとの連携

3 実践事例

【学力向上に向けての取組】

フリートークからより主体的な学び合いへ

2年前から児童生徒が自ら考えを表現したり、友達の考えから学ぼうとしたりする姿を促す手段として、フリートークを取り入れてきた。フリートークに慣れてきた昨年度は、児童生徒が自ら「フリートークがしたい。」「班で相談したい。」などと、主体的に判断し、決定する授業づくりに取り組んだ。

今年度は、「フリートーク」という形に捉われず、児童生徒が自ら友達と協働して学ぼうとする姿勢を大切に。授業の中で、児童生徒が、自分の考えや思いを自由につぶやき合い、そのつぶやきを活用して指導者が発問をしたり、発言をした児童生徒に対し、自由に意見を述べ合い、学級全体での話し合いになるよう授業を展開したりした。また、児童生徒が自分の考えをもった上で、自然と立ちあがって友達同士で考えや思いを交流したり、教え合ったりすることを認めていくことにより、児童生徒が自ら課題を解決しようとする姿勢が見られるようになるなど、より児童生徒の思いや考えを深め合う「主体的で深い学び」を授業の中で展開することができた。

フリートークを取り入れていたことから、児童生徒は自ら考えを友達同士で伝え合うことに対する抵抗感を減らすことができ、形に捉われぬ協働的な学びにつながるすることができた。



課題設定の工夫

児童が学習課題に興味関心をもち、主体的に学習に取り組めるように、導入において児童生徒の疑問や学びたいことから読みの問いを作り学習を進めた。自ら立てた問いを解決し、さらに新しい問いが生まれ、読みがつながっていった。



基礎的・基本的な学習事項の定着



中学校では、長期休業期間中の学習支援、そして本年度4回行われた定期試験の前、抽出生徒を中心とした補充学習に取り組んだ。さらに定期試験後には、習熟に応じた追試験を実施した。この追試験によって、「生徒達が何を理解し、何をどう理解できていなかったのか」について、教師も考える視点ができ、また生徒も課題

を自分自身で解決しようとする姿勢がみられるようになった。
また、Rey-Osterrieth複雑図形の活用により、生徒の認知特性の実態把握に努め、個別最適化の学習支援につなげた。

【学習習慣の定着・家庭学習の充実】

家庭学習を見つめ直す

- ①漢字の家庭学習を自分で決めて取り組む
自分で学習内容・分量を考えて、学習のめあてを自ら設定し、家庭学習に取り組んだ。
- ②自主ノート
授業の予習・復習や学習内容の延長にある課題など自分で学びたい内容を自ら設定して学習した。さらに自主ノートを児童生徒間で交流することで内容の深化を図った。

学習に関わるアンケートの分析

アンケートの結果分析を各学校・学年の経時変化を見ていくことを通して、児童生徒の変容を的確に分析し、指導に生かした。

表1 自分で課題を見つけて家庭学習を進めている回答[%]
(7月と12月の比較)

	中学1年	中学2年	中学3年
7月	63.7	66.4	76.9
12月	71.0	62.6	81.9
差	7.3	-3.8	5.0

	小学4年	小学5年	小学6年
7月	77.0	82.0	82.5
12月	81.2	84.5	86.4
差	4.2	2.5	3.9

・中学2年を除くすべての学年において、「自分で課題を見つけて家庭学習を進めている」と回答した児童生徒が増える傾向にある。(表1)

【個に応じた指導の充実】

個別の指導計画を作成し、研究授業では、抽出児童生徒の状況を把握した上で授業観察を行い、研究協議を行った。

(1) 具体的な取組内容

ADとの連携

ア 小4女子Aの事例
2学期に入り登校をしづらくなったため、家庭訪問や面談などを行った。母は女子Aの弟ばかりに目が向けられている傾向がみられ、両親と面談を重ねることで登校しづらりの改善を図った。

イ 小1男子Bの事例
2学期に入り立ち歩きがみられ、発達検査を進めるが母はなかなか応じることが出来なかった。そこでADは、以前中3の兄との関わりにおいて、父との接点があり父も含め面談を重ね、発達検査の実施につなげることができた。

(2) 児童生徒の変容

ア 小5男子Aの事例
自分自身で家庭学習の課題を設定して取り組めるようにな

り、また、この課題設定の手法をクラス全体で共有できるようになった。この結果、当該児童は漢字テストにおいて9割得点ができるようになるなど、大きな伸びが見られた。

イ 中2男子Bの事例

長期休業期間中の学習支援や定期試験対策としての質問教室への参加を促す中で、徐々に学習に向き合う姿勢に改善傾向がみられた。また、担任教諭の連携により本人の努力や成長を保護者に伝えることで、提出課題に確実に取り組むことができるようになった。

4 研究の成果と課題等

(1) 成果

- ・小中合同の研修会において、各校の取組を交流することで、自校の授業改善につなげることができた。
- ・学習に関わるアンケートで、「授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。(協働的な学び)」の項目の肯定的評価と、「授業では、解決しようとする課題について、『なぜだろう』、『やってみよう』と思います。(主体的に学ぶ姿勢)」の項目の児童生徒数が上昇傾向を示した。これらは児童生徒が、これまでの取組を通して、協働的な学びの良さを実感している表れと思われる。さらに、児童生徒自らが授業に主体的に参加しようとする様子が表出されている。(表2)

表2 協働的な学習と主体性の肯定的回答[%]
(7月と12月の比較)

	協働的な学び			主体的に学ぶ姿勢		
	7月	12月	差	7月	12月	差
大門中	89.1	89.1	0	77.8	78.1	+0.3
大津野小	85.9	84.9	-1.0	86.6	87.4	+0.7
旭丘小	80.9	92.6	+11.6	81.3	83.5	+2.2
野々浜小	84.9	86.4	+1.5	78.5	93.5	+15.0

(2) 課題

- ・知識や技能の習得だけではなく、「できる」を「わかる」にするために教師が児童生徒にどのようにかかわっていくのか。

(3) 今後の改善方策等

- ①授業改善の継続
 - ・児童生徒が自ら疑問を持って考えたいと思う課題設定を行う。
 - ・児童生徒が自ら学びを選択・決定する。
 - ・子ども主体の学びに向けた授業づくりを進めていく。引き続き小中合同研修会等で日々の授業づくりや児童生徒の学習状況等を交流し、子どもの主体性を高める授業づくりを協議していく。
- ②家庭学習の充実
 - ・個別最適化を図る目的で、児童生徒自身が自らの学習を振り返り、家庭学習の内容や時間等を自ら決め、自己の課題や興味を追究し、学びを深める家庭学習としていく。
- ③組織づくり
 - ・連携担当教員が各校の実態把握を踏まえ、現状や課題を確認・連携し、共通認識をもって改善を図る。同時に各校の具体的な実践事例の交流を通して、校区全体の取組としていく。